



● 国際サーカス村構想を再考する

創立17年を終了したところで、それを区切りとして休校へと舵をきったサーカス学校は、約7ヶ月後の今年の4月1日に再開することになったが、今後いつまで続けられるかは正直なところわからない。というのも、今後、どれだけの生徒が集まるかわからないからである。生徒が5人を切ってしまうと、赤字が大きくなり、その穴埋めが難しくなる。もちろん、どこからかある程度まとまった額の寄付があれば、維持可能なのは言うまでもないのだが。寄付が集まっても学ぶ生徒が集まらなければ、サーカス学校を継続する意味がない。

休校の間に考えていたことが幾つかあるが、そのなかのひとつは、サーカス学校が求めていたものは、専門学校のような利潤目的の学校経営ではなく、サーカスを学びたいと思う若者が訓練できる場所作り、そこからプロで活躍できる人々が巣立っていくことであった。

サーカス学校で学んだ若者の多くが東京都へブレンアーティスト公認となり、あちこちで活動する一方で、この資格制度を快くおもわないために資格審査に応募しないまま活動している卒業生もいるし、また海外にでて活躍している者もいるので、その点は評価されてもいいだろう。

しかしもとのサーカス村構想に立ちかえると、例えばサーカスで活躍した人々がサーカス学校のある現在のみどり市東町に住んでもらうことができないかといった願いもあった。そこで、かつて私が所属していた関根

サーカスの方に来ていただき、生徒を教え一緒に住んでいただくといった試みも行ったが、東町で老後を過ごす生活を選んでもらうことはできなかった。

今は、そうした試みを行った頃と比較すると、東町、とくにサーカス学校のある沢入地区の過疎化は相当進んでいるので、サーカスで働いた方がこの地に移住してもらえる可能性はほとんどない状況である。

それ故、サーカス村構想の原点に戻って考え、サーカス学校の将来性、あるいはサーカスアーティストのふるさと作りという観点からみれば、ほぼ挫折していると言わざるをえない。サーカス、クラウンのワークショップなどを始め、サーカス資料館を建て学校を始めてから、20年以上の歳月が流れているが、サーカス関係者が生活し、サーカスを学ぶ人で活気の溢れた地域を創造する目標は果たせなかったわけである。だが、それでも、なんとかサーカス学校を再開しようというのは、学びたい若者が手をあげているからである。

そこで、こうした若者たちの希望を叶えながら、あらたな活動ができないものかを考えたいのである。

サーカス村構想そのものを求めているわけではないが、パフォーマーを育てる施設を作りたい、あるいはサーカスパフォーマーを育てつつテント興行を行うという計画を持って相談しにくる人がいるが、そうした話で実現にこぎつけたものは残念ながら今のところない。とはいえそうした相談が舞いこむのは、サーカスというパフォーマンス、ショーの世界を、アーティストを育てる段階からチャレンジしたいと考えている人々が少なからず存在するわけで、そうした人々がイメージしている観客を含めたサーカスショーの世界がまだ実現していないものの、根強く求められているのではないだろうか。

全く楽観的すぎて話しにならないと言われようと、サーカスに対するさまざまな人々の想いのようなものをすっぱりと包みこむようなアイデアとしては、やはり、学校、劇場、資料館からサーカス関係者の住む居住地区までを視野に入れていたサーカス村構想に基づいた地域を生みだすべきだと、私の考えはどうしてもそこへと舞い戻ってしまう。そこで、このサーカス村構想を改めて発信していこうと思うのだが、どうだろうか。

もちろん、かならずしも新天地を求めるというのではないが、新天地を求めないというのでもない。以前、福島第一原発事故による放射能被害で休校した時に、サーカス学校の移転が可能と思われる場所を2、3箇所見に行ったが、その時は、サーカス村構想としてではなく、単にサーカス学校の移転先として場所探しをしたためもあって、そこにいわばサーカス村構想という夢の移植を提案するのは、なにかお門違いの感があった。事実、移転はしなかったのだが、その時に感じていたのはサーカス学校だけを移転させてしまっただけでは、サーカス村構想を矮小化しかねないということであった。移転できそうな場所があっても、細部を詰めるところまでいかなかったのは、そんな理由があつたことだった。

そして今は、新天地を求めるといふのであれば、やはりサーカス村構想の原点にかえって可能性を追求したい。

資金？ そう資金は、現在のサーカス学校の運営でピーピー言っているのだから、当然、ひたすらゼロにちかひ。だが、贈与論ではないが、サーカス村構想の実現そのもの、そこから生まれる新しい文化芸術活動が、このサーカス村構想実現にかかる資金の対価という考えはどうだろうか。夢物語であり非現実的な発想と一笑に付されることだろうが、文化芸術活動、そしてそれが運動として機能していくことが、それを実現するためにかかる資金の対価であるという考え方は、現在のお金・資本のルールとは次元を異にする贈与に基づく社会の仕組みの考え方とも通底するのではないか。

こうした考え方に賛同してくださる方々がいる初夢を見たのか見なかったような。で、新たな一步を踏みだししていくつもりである。(西田 敬一)

※別紙「国際サーカス村 構想」をぜひご覧いただきますようお願いいたします。

2019年4月1日 沢入国際サーカス学校は授業を再開します。男女6名の若者が入学予定です。また、体験入学に来る者もいます。指導は、当校卒業生の天野真志君と、ナー ज्या先生の娘でウクライナのサーカス学校出身のオーリャが担当します。



モンゴルサーカスの人々を訪ねて・2018年～2019年未年始

個人的には高校生の頃から12年間、会社としては25年以上交流を続けているモンゴルサーカスの人々。2018年～2019年の年末年始にモンゴルに渡り2週間ほど滞在し、複数の団体や教室を訪ねてまいりました。彼・彼女らとの会話や活動を通して、モンゴルに生きるサーカスの人々の「今」をお伝えします。

(ACC ウェブサイトに掲載したものです。 http://www.accircus.com/news/2018_2019mongolcircus01/)

I. 2018年12月26日 ダルハン市の「シヨンホードイサーカス団」



首都ウランバートルより北へ約230km。モンゴル第三の都市と呼ばれるダルハン・オール県のダルハン市（人口約12万人）のサーカス団を訪れました。午前8時、ウランバートルから車で出発。メーターパネルの外気温はずっとマイナス30度と表示され続けています。マイナス30度以下は測れないようです。車窓には内側からビッシリと氷が張り、運転手が目視できるのはフロントの、それも半分のみという状態でした。休憩時に車から降りると、すぐにまつげや眉毛の水分が凍り出し、手足がしびれて動かなくなってくるので3分間も外にいられない、そんな厳しい寒さの中車は進みます。

2018年12月中旬。モンゴルからNPO法人国際サーカス村協会のウェブサイトを通じて、一通の問い合わせメールが届きました。「そちらのサーカス学校に、モンゴルからの入学は可能でしょうか?」。モンゴルには専門的なサーカスの育成団体がいくつもあるというのに、どうしてわざわざ日本のサーカス学校に?疑問を感じながら返信すると、彼女は「自分は首都に住んでいるのだけれど、子どもたちのサーカス団がウランバートルから200km離れたダルハンというところにあります。見学もできます」とのこと。何やらよくわからないやり取りですが、首都から200km以上離れた地でサーカスを行っているという団体に大きな興味を持ちました。年末年始をモンゴルで過ごす予定だった私は、見学させてほしいと申し出ました。

ヒシゲーさんというそのモンゴル人女性は、日本語の通訳の仕事をしているとのこと。彼女がなぜ連絡をくれたのか、ダルハンのサーカス団とはどんな団体なのか、そしてサーカス団と彼女の関わりもよくわからないまま連絡を取り合い、12月26日、ウランバートルで彼女と合流して車で3時間。ダルハン市内の青年劇場に到着しました。[左写真・上]「シヨンホードイサーカス団」はこちらの建物内の一室を練習場として使っています。

中に入って階段を上り、細い廊下を渡った奥に、練習部屋がありました。[3頁写真]練習部屋に入ると…。広さは50㎡ほど。天井もさほど高くはない中に、衣装、道具、子どもたちの荷物、コントーションテーブルが置かれていました。そこで様々な芸の練習を、20名ほどがひしめきあいながら行っていました。バウンズボールやクラブジャグリングの練習をする男の子たちのすぐ傍らでローラーボーラーを5段積み重ねている男の子、そして幼い女の子たち10人ほどがコントーションの練習をしていました。[3頁写真]

こちらの部屋だけでは間に合わないため、劇場内の廊下部分などを使ってアクロバットやグループジャグリング、バンキンなどの練習をしていました。



←劇場内の廊下にマットを敷きアクロバットの練習をしたり、ジャグリングを練習したりしている子どもたち。

「シオンホードイサーカス団」代表のトゥムル氏[左写真・下]。奥様はバトツェツェグ(左)さん。おふたりが、シオンホードイサーカス団の歴史を話してくださいました。

「私たちは若い頃、サーカス学校を卒業した後、ヨーロッパに渡ってあちこちのサーカスを回っていました。1990年ごろ、モンゴルが社会主義から民主主義に移行した時期はヨーロッパにいたので、自分の国で起こっていること、変化を知らずに、2005年に帰国したとき、貧しい子どもたちが多くいることを目の当たりにし、衝撃を受けました。ウランバートルから実家のダルハンに帰るために汽車に乗っていたとき、ご飯を食べていたら、ヨレヨレの服を着た子どもがひとり来て、『すみません、ごはんを分けてもらえませんか』と言いました。どうぞ、と分けてあげるとその子は『友達も連れてきていいですか』と言うのです。いいよ、と答えると5、6人くらいの同じような格好の子どもたちが現れました。私たちは、汽車が停車しているときにその子どもたち全員を連れて外へ出て、食堂に入り、子どもたちにご飯を食べさせました。みんな、すごい勢いで食べていました。とてもお



↑NHK WORLD JAPAN “A Circus of Street Kids : Mongolia” 番組より

腹を空かせていたようでした。『一体何日食べていないの』と聞くと『もう一週間くらいほとんど何も食べてない』とのことでした。

衝撃を受けました。ヨーロッパへ行っている間に、自分の国はなんて貧しくなってしまったのだと悲しくなりました。私たちには息子がいるのですが、自分の子どもと同じくらいの子供たちがこんなに貧しく、お腹を空かせているなんて…。私たちがヨーロッパへ渡る以前、社会主義の時代にこういう子どもたちを目にしたことはありませんでした。自分の子どももこうなっていたかもしれないと思うと、見過ごすことはできませんでした。夫と私は、子どもたちの支援をしようと決意しました。私たちはサーカスの人間だから、子どもたちにサーカスを教えてあげよう、と。実は、ヨーロッパの仕事は次の契約が決まっていたのですが、私は自分の国をなんとかしないといけないと思い、ヨーロッパの方を断りました。契約を結んだ後だったので、罰金を支払うことになりましたよ。」



←NHK WORLD JAPAN “A Circus of Street Kids : Mongolia”
番組ページより。マンホールの中で身を寄せ合いながら、
こちらを見上げる子どもたち。

でいるマンホールをいくつか回り、声をかけていきました。子どもたちはどの子もお腹を空かせていたので、まずごはんを与えました。子どもたちがやってきた最初の動機は『あそこに行けばご飯が食べられる』です。それから、着ているものが汚れていたのを、洗濯機を買ってあげて、身につけるものや環境は清潔にしないとけないよ、と教えました。それから、サーカスを教え始めました。

といっても、これらのお金は私たちがヨーロッパで得た収入を貯金していた分から出していますし、子どもたちにはもちろん無償で教えていますので、サーカス専用の道具を買い揃えることなどはできません。だからはじめは、ケチャップの容器を使った手作りの道具でジャグリングの練習をしていました。今でも、ローラーボーラーはその辺に落ちていた水道管を利用して使っていますし、フラフープなどの道具も自分たちで作って、使っています」



←ケチャップ容器を使って手作りをしたジャグリング道具。練習部屋の一番高いところに飾ってありました。↓捨てられていた水道管を利用し、ローラーボーラーの道具に。



私が見学に行ったときは、クラブやボールなど専用の道具が使われていました。ケチャップの容器のジャグリング道具は、誇らしさの象徴なのか、はたまた臥薪嘗胆ということなのか、部屋の一番高いところに飾られていました。これを見たときに私はふと、ジャグリングという芸はケチャップの容器から始まったのかもしれない、という気持ちになりました。専用の道具が最初からあったわけではありません。身近にあるものをちょっぴり工夫して楽しみ、芸となっていく。これこそが源であり本物なのではないか…。と同時に、ケチャップ容器の手作り道具を大切にしているこのサーカス団をととても愛おしく感じました。なんとかして応援しなければいけないと感じました。

「子どもたちにサーカスを教え始めると、どんどん上手くなっていきました。基礎を教えた後は、子どもたちが自ら Youtube などの動画サイトを見ながら、新しい技や芸を覚えていきました。そうして 2017 年、2018 年と 2 年続けて、海外でのショーの仕事をもたらすまでになりました。モンゴルサーカス協会から『国民のサーカス』という称号を公式にもらいました。」それは「プロのサーカス団である」というお墨付きということなのだそうです。

実はこちらのサーカス団を NHK World JAPAN が取り上げて、私が訪問した日の翌々日に放映開始をするというタイミングでした。その番組制作の際に通訳として関わったのがヒシゲーさんなのでした。私が名刺を差し出し、会社の説明を始めるとすぐに、トゥムル氏の目頭が熱くなっていくのがわかりました。「弊社ではテーマパークや遊園地などの施設と、サーカスとを結ぶ業務を行っていて…」と説明していると「わかる。知っているよ。リトルワールドだろう。よく知っているさ。」と話を遮ったトゥムル氏。どんどん顔が赤くなっていく彼が「私は以前、そこに出演したメンバーのひとりだ」と発言したとき、涙が静かにこぼれていきました。傍の奥様もうつむきながら必死に涙をこらえているような様子でした。「あなたたちと、ずっと連絡をとりたいと思っていたんです。私の生徒たちを、日本で公演したあの場所に連れて行ってあげたい、出演させてあげたいと思いつけてきたんです。西田さんとは実は facebook でつながっているのですが、私は何ぶんことばがわからないのでおかしなことを言って嫌われてはいけないと思い、西田さんの投稿にイネをするのみでした。こんな形でご縁が広がるなんて」みんな黙りました。時間が静かに、とてもゆっくり流れるのを感じました。

トゥムルさんが少し落ち着きを取り戻し「恥ずかしいところを見せてしまって申し訳ないです。今までの苦勞が突然、どっと思ひ出されて、感傷的になってしまったようです」と言うと、ヒシゲーさんが「そうですよね。普段の生活を送っているときはどんなに苦勞していてもただ過ぎていくものが、何かの引き金で一気に溢れ出てくる瞬間があるのですよね」と答えました。私は、気の効いたことを言うものだなあと思いながら傍で黙っているだけでした。

トゥムル氏が日本で公演をしたときの写真アルバムを見せてくださいました。若いトゥムルさんの横に、社長と元上司の笑顔が収まっているのを見つけました。サーカスというのは世界中で多くの人に関わっているはずが、なんと濃厚で、世界は狭いと感じる経験を多々することでしょうか。知っている地や人の顔が次々と出てくるのです。遠い親戚の家に来たような、不思議な気分になります。



↑1998 年、野外民族博物館「リトルワールド」にて開催された『モンゴルサーカス』公演時の写真。

(左) 土台の男性が、トゥムル氏。(右) 弊社代表の西田の姿を見つけました。



その後、生徒たちの練習を見学させていただきました。子どもたちはジャグリング、バンキン、コントーションなどの演目を代わる代わる見せてくれました。男の子も女の子も、ひとりで3つも4つも芸を行っていました。「舞台上じゃなくて、こういうふうに芸を披露するっていうのは、かえって緊張しちゃうな」とはにかみながら、次はあれをやろうかこれも見せようかと自らの芸を披露してくれました。「すごいね！」と拍手をすると、「こんなの朝飯前さ」と照れていました。ちなみに練習部屋については、劇場に自分たちの活動を理解してもらい、無償で借り

ているのだそうです。その代わりに、劇場の催しに生徒たちの出演、手伝いを要請された場合は、無償で働くという約束を結んでいるのだそうです。

ヒシゲーさんが、特にこの子のことを覚えてほしいと呼んだのは、ツェンゲル君という20代前半の男の子でした。「この子にはお父さんとお母さんがいないです。彼は幼い頃に捨てられました。家族がいない、学校に行くこともない、仕事もない。ほかに何もすることがないから、彼は毎日練習場に来て、朝から晩まで起きているときはずっと練習しているんです。毎日毎日、ずっとひとりでジャグリングをしていたら一番上手くなりました。指導者に教えられていないことも自分で調べてできるようになって、今ではグループのリーダーを務め、将来はショーホードイサーカスを継ぎたいと言っています。」



←7つのボールでバウンスジャグリングをするツェンゲル君。動画サイトなどを見ながら独学したそうです。

練習部屋の奥の方でひとり黙々と練習していた子でした。彼がある日、日本に行きたいのだけれどどうすればよいのかとヒシゲーさんに声をかけてきたので、ヒシゲーさんは日本語でウェブ上を検索し、サーカス村協会のサイトを見つけたので、問い合わせをしたという経緯だったのだそうです。気付くと、横に座っていたヒシゲーさんの頬を涙が伝っていました。「子どもたちがこんなに素晴らしい芸を披露してくれて、泣けますね。」と声をかけると、彼女は「あゆみさんも泣きますか？どこの世界でも、泣くものですか？サーカスというのは」と言いました。ヒシゲーさんは続けます。「私は今までサーカスを観て泣きたいと思ったことはなかったです。子どものときにたまに観たことがありましたが、すごいな、楽しいなと思うだけで、それ以外のことを感じたことはありませんでした。昨年从这个子たちと出会って、関わり、生い立ちや生活を知った後にこの子たちのショーを観たときに、初めて泣きました。彼らが舞台上に立つと、衣装と照明でキラキラ輝いて、素晴らしい技を披露して、観客から拍手をもらいます。とても、こんなひどい生活をしてきた

子とは思えないのです。気付いたら泣いていました。」

そう言いながらヒシゲーさんは、スマホに一枚の写真を映し出して、見せてくれました。何を見せられたのか、一瞬、理解ができませんでした。窓ひとつなく、天井も床も壁もコンクリートがボロボロとむき出しになっている四角い空間の隅に、汚れた便座がひとつ置いてあり、刑務所の跡地か何かだろうかという写真でした。ヒシゲーさんは「彼の部屋です」と言いました。マンホールから出た後、身寄りのないツェンゲル君は友達の家の地下に住まわせてもらっているのだそうです。「えっ、部屋って、ここに住んでいるのですか？彼が？」と私が聞く

と、ヒシゲーさんはさっとスマホを伏せました。「隠しますね。子どもたちに、自分の部屋がこんなに汚いなんて知られたくない、悲しくて恥ずかしい思いをさせたくないから、この写真を見たとは言わないでください。でも、そうです、これが彼の家なんです。」私が以前、モンゴルでコントーションを習っていた当時の教室の子どもたちも貧しい家庭の子が多かったのですが、彼ほどの子は出会ったことがありませんでした。皆ゲルがあり、保護者がいたんです。ヒシゲーさんは、続けました。「子どもたちはみんな素直でよい子たちばかり。なんとかしてあげたいという気持ちがあります。それに、この夫婦の取り組みには敬意を表し、支援しないわけにはいかないでしょう。」



↑モンゴルの遊牧民の住居 ゲル。円形で外は羊毛で覆います。厳しい大自然の中快適に生活することのできる遊牧民の智慧が詰まった住居なのですが、移動を前提としているため都市部での定住生活に向いているとは言いがたく、ただ、1992年以降民主化に伴い地方から都市への方が流入、居住している人々は多くいます。ちなみにゲルということばには建物そのものを指すだけでなく「家」「家族」の意味もあります。中国語ではパオと呼ばれています。



私はようやく、どんな思いでヒシゲーさんがサーカス村協会のウェブサイトを見つけて問い合わせをしてくれたのかを理解しました。

「ツェンゲル君にはお金がないので、日本に行き、生活するというのは不可能だと思います。でも、彼本人の口から『日本に行ってみたい。サーカス学校はないのだろうか。』と相談を受けたとき、お金が無いから無理に決まっているでしょうと即答するのではなく、結果実現できなかったとしても、日本にはこういう学校があつて学費がいくら、生活費がいくらかかるそうだよ、工面できそうかと会話をする必要があると思いました。もちろん、可能性があるのならこの若者を外に連れ出し、色々なものを見せてあげて目を開かせてあげることができたら、と願っていますが…」

記念に集合写真を撮り、練習場を後にしました。

日本に帰ってきてからも出会った子どもたちのことが忘れられず個人として微力であっても何か支援できることがないかと思い、ヒシゲーさんに、どんなものが需要ですかと聞いてみました。すると「食べ物」という答えが返ってきました。「子どもたちは毎日食べるものが足りていない状態です。栄養がとれていません。幼い頃から、大人の愛情を受けてこなかったのも、みんな身体が小さいですし、美味しいものを食べることに慣れていません。普段食べているものは、カップラーメンか、ボールツォグ（小麦粉の生地を油で揚げたもの）くらいのもので。」<続く>

(長屋 あゆみ)

サーカス公演情報

★木下大サーカス

- 大阪公演 公演期間 2018年12月8日(土)～2019年3月11日(月)
- 休演日 毎週木曜日 ●会場 大阪駅前うめきた グランフロント西 特設会場
- 電話 06-6359-4500 ●ウェブサイト <http://www.kinoshita-circus.co.jp/>

★ポップサーカス

- 山梨公演 公演期間 2019年2月23日(土)～4月7日(日)
- 休演日 毎週木曜日。但し、3/20(水)は休演。3/21(木祝)は開演 ●会場 ラザウォーク甲斐双葉 大テント
- 電話 (2月中旬迄) ☎055-269-6111 (2月中旬より) ☎0551-28-1877 ●ウェブサイト <http://www.pop-circus.co.jp/>

★ハッピードリームサーカス

- 熊本公演 公演期間 2019年3月16日(土)～5月12日(日) ●会場 宇土シティモール特設会場
- 休演日 3/20(水)、3/28(木)、4/4(木)、4/11(木)、4/18(木)、4/25(木)、5/2(木)、5/9(木)
- 電話 (3/14迄) ☎096-351-1140 (3/15から) ☎0964-27-4222 ●ウェブサイト <http://www.dreamcircus.jp/>

★シルク・ドゥ・ソレイユ創設30周年記念作品 『ダイハツ キュリオス』

- 福岡公演 2019年2月15日(金)～3月31日(日) ●会場 福岡ビッグトップ(宮崎宮外苑)
- 休演日 2/18(月)、2/21(木)、2/28(木)、3/6(水)、3/7(木)、3/14(木)、3/20(水)、3/27(水)
- お問合せ ダイハツ キュリオス福岡公演チケットセンター(キョードー西日本内) ☎092-718-3939
- ウェブサイト <http://www.kurios.jp/index.html>

その他公演情報

★山本光洋ソロライブ「丘を越えて」

- 日時 2019年3月8日(金) 19:30 / 9日(土) 14:00 & 18:00 (受付開始は開演1時間前、開場は開演の30分前)
 - 会場 plan-B (東京メトロ丸の内線「中野富士見町」駅徒歩7分)
 - チケット ご予約のみ 3,000円 / 学生 1,000円 (要学生証) 日時指定・全席自由
 - チケット予約・お問合せ 山本光洋 Office ☎03-3951-1999
- メール info@koyoworld.com ①お名前 ②希望日時 ③枚数 ④連絡先を明記のうえ、お申し込みください。

★「みんなであそぼ! 森と劇場のサーカスフェスタ 2019」

- 練馬文化センターとその周りが3月30日(土)、サーカス広場に! 赤ちゃんからお年寄りまで、障害のある方もない方も、みんなで遊ぼう! ①劇場ステージでのパントマイム・サーカスショー②子どもの遊び場 ③ワークショップ広場 ④森のステージ大道芸ショー ⑤ねりま de 女子マルシェ ⑥みんなでわいわい! 人形音楽大行進、そして練馬産の新鮮野菜が並ぶマルシェなど盛りだくさんです。沢入国際サーカス学校卒業生が多数出演いたします。※有料と無料のコンテンツがございます。
- 日時 2019年3月30日(土) 9:30-16:30 ●会場 平成つつじ公園、練馬駅周辺、練馬文化センター
 - 出演 ふくろこうじ、浅草雑芸団、ムンドノーポぼこブヨ～ダン、シャボン玉くりちゃん、沢入国際サーカス学校卒業生サーカス団
 - お問合せ ☎03-3993-3311 (練馬文化センター 代表)
 - ウェブサイト https://www.neribun.or.jp/event/detail_n.cgi?id=201812281545971069

★パントマイム シルヴプレ 第十回公演『渚はヴィオレット 青と赤とマイムがあつて、ふふふ。』

- 日時 2019年3月14日(木) 19:30 / 15日(金) 14:30 & 19:30 (開場は開演の30分前)
- 会場 WAKABACHO WHARF 若葉町ウオーフ (京急「黄金町」駅徒歩4分)
- 作・演出・出演 シルヴプレ (柴崎岳史 堀江のぞみ) ●料金 前売 2,500円 当日 2,800円 (日時指定・全席自由)
- チケット申込 シルヴプレ荘 sivouplaitsou@gmail.com ①お名前 ②日時 ③枚数 ④ご連絡先をお知らせください。
若葉町ウオーフ TEL045-315-6025

★ヨコハマ大道芸 2019



横浜の春の風物詩「ヨコハマ大道芸」。今年のスペシャルプログラムのテーマは「サーカス」。グランモール公園美術の広場にて、沢入国際サーカス学校出身パフォーマー多数がスペシャルショーを行います！

- 日時 2019年4月20日(土)・21日(日)
- ウェブサイト <http://daidogeij.jp/>

★第44回 野毛大道芸

スペシャルプログラムに、沢入国際サーカス学校出身パフォーマーが多数出演し特別編成ショーを披露します。

<パスパルトウ座> 出演：しゅうちょう、Asako、タカシエンカ、健斗、颯星

<ジヨングルルー座> 出演：CHEEKY!、DAIKI、田中健太、喜多和裕、目黒宏次郎

- 日時 2019年4月27日(土)・28日(日) ウェブサイト <http://nogedaidogeij.com/>

